

Book-review: Masaharu Goto: Vera Caslavská, the most beautiful

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/18641

後藤正治著 『ベラ・チャスラフスカ 最も美しく』

齋 學 淳 郎*

Masaharu Goto: *Věra Čáslavská, the most beautiful.*

HOUGAKU Atsurou*

本書は、後藤正治氏によるチェコ¹⁾の著名な女子体操選手ベラ・チャスラフスカを題材としたノンフィクションであり、2004年7月に単行本として出版され、2006年9月に文庫化された。評者はチェコスポート史の専門家ではないが、示唆を得るところも多いので、以下読後感も交え、本書の内容を紹介したい²⁾。

オリンピック東京大会(1964年)で、個人総合、平均台、跳馬で金メダルを獲得したチャスラフスカのダイナミックで、同時に柔らかな肢体が奏でる優美な技、稀なる美貌と気品、メキシコ大会(1968年)前の「プラハの春」(言論の自由、出入国の自由、市場経済の導入などを掲げた改革運動)に賛同し、チェコ国内に幽閉されているといったニュース、大会直前に姿をみせメダルの獲得を重ねるとともに、ソビエトの国歌演奏にそっぽを向いた表彰台でのその姿、その後の断片的な情報(体操界を追われ…)、ピロード革命(1989年)渦中での姿、その後に来日した時のどこか苦悩した姿、その後の風聞(精神に変調をきたした…)。「チャスラフスカになにが起きたのか。彼女がぐり抜けた年月はどのようなものであったのか。そもそもベラその人とはなにのものであるのか…。このように序章(旅へ)では、著者の彼女への関心が記されている。また、序章からは、本書の構想も窺える。その構想とは、20世紀最大の夢であっ

た社会主義社会を、東欧³⁾社会主義圏の小国チェコの民主化動向と、チャスラフスカという個の人生を通じて見詰め直そうとすることのように思われる。全共闘世代であった著者の社会主義への関心は本書の端々から窺えるが、個というものへの関心については、現在の仕事との関連で、序章に述べられている。「大学卒業後の二十代、いくつかの職歴と紆余曲折した心の遍歴を重ねた。振り返って、なにか確かなものを得たというわけではなかったが、総じて、思想、イデオロギーといった形而上学から遠ざかり、個別の、具体的な事象への関心を深めていった年月であったように思う。私の心ひかれるものは、詰まるところ、個別の人生であり、なかなずく<個の態度>というものであってそれ以外にはなかった。いまにして思えば、もともとそういう資質の人間であったのだろう。二十代の終わり、そういう地平に立ち戻ったとき、いまの仕事をはじめている」。そして、序章からは、プラハの春に際し、「人間の顔をした社会主義」を標榜する改革路線を支持し、運動の核となった「二千語宣言」にチャスラフスカがなぜ署名し、春がソビエトの戦車によって蹂躪され、“正常化”した国家において、多くの人々が署名を撤回していったにもかかわらず、なぜ彼女は署名を撤回しなかったのかを追おうとする姿勢が窺える。非撤回は社会的地位と生活権の剥奪を意味したが、彼

*水産大学校

*National Fisheries University

女は少数の非撤回者であり続けたのである。1999年4月にチェコを訪れた際、彼女との面談がかなわなかった著者は、日本語も堪能なヴァチカージュに彼女あての幾つかの質問を依頼し、帰国した。しばらくしてファックスが入ったが、そこには、あなたはなぜ二千語宣言への署名を撤回しなかったのですか—という著者の問いに対するチャスラフスカの答えが翻訳され、日本語で次のように書かれていた。「節義のために。それが正しいとする気持ちはその後も変わらなかったから」。この言葉に感銘した著者は、あたうかぎりのことはしてみようと思ったと、この構想に取り組む決意を記している。

第1章(寒い国のバラ)では、まずチェコの地勢、歴史、文化、チェコ人の気質などに触れられているが、著者は、「したたかな抵抗の精神と忍耐、加えていえば、なるせなさと一体となったユーモアというのが、チェコの歴史に付着する匂い」という言葉であらわし、チャスラフスカの背後にチェコの地に染み込んだ、したたかで粘っこい無形の歴史的伝承を見ている。そして、この章では、チャスラフスカの誕生、体操との出会い、成長が、彼女が最も輝いていた10代を中心に述べられている。彼女は1942年5月生まれ、著者は戦中生まれの子孫ということが彼女を解く一つの鍵としている。彼女にかかわる自伝は二つあり、ともに日本語に訳されている。著者は、それらはオリンピック東京大会までの彼女の半生が記されているが、プラハの春、メキシコ大会前後のこと、およびそれ以降のことは記されておらず、政治体制や時代状況についての記述がないとし、それらをも用いつつ、彼女の成長を政治・社会の変化及びスポーツ・体操の変化と関連づけて述べている。とりわけ、彼女のコーチ、同僚などへのインタビューにもとづく叙述は、彼女のみならず、社会主義国家チェコにおける社会とスポーツの状況(例えば、トレーニング、指導者、選手管理、報酬、身分保障、ソビエト選手への感情など)を窺わせ、スポーツ史を研究する者にも示唆的である。オリンピック東京大会時の彼女の演技について、著者は、旧

女王ソビエトのラチニナと比較し、「完成度は及ばないにせよ、チャスラフスカには柔らかさとスケールの大きさがあつた。加えて、華があつた。ラチニナが開花したヒマワリとすれば、ペラはバラだった」と著している。当時のチェコチームの一員セドラーチコワは、チャスラフスカのことを「目標に向かって努力し、真っ直ぐにたたかう人だった」と後に語っている。著者はインタビューに際して、チャスラフスカの非撤回の理由も尋ねているが、当時の関係者は、もともとの資質とともに、金メダルがもたらした彼女の誇りを憶測としてあげている。

第2章(東洋の娘たち)では、荒川御幸、小野清子、中村多仁子へのインタビューを中心に、戦後日本における女子体操の発展、及び、ローマ大会(1960年)からメキシコ大会の間に、彼女たちから見たチャスラフスカのことなどが述べられている。日本女子体操チームのコーチであつた荒川は、東京大会のチャスラフスカの演技について、専門の立場から、「技のスケール、捻りを加えた新技、切れ味、柔らかさ、女性美…。どこを切っても美しい。これぞ体操だ、と思えた」と語っている。体育館以外でもチャスラフスカと長く交流を持ち続けた荒川らは、人・チャスラフスカに、「生真面目」「一途」「一直線」「祖国チェコを愛する自然なナショナリスト」「なにか包み込むような温かさ」「凜としたたずまい」などの人間的な魅力も感じていた。メキシコ大会の直前、それは、改革を求めたプラハの春に対し、ワルシャワ条約機構軍がチェコに侵入し、モスクワの後押しする保守派が権力を握りつつある時期であつた。喪服の色である黒のユニホームを纏い大会に臨んだチャスラフスカは個人総合で連覇するが、荒川のその演技に対する気持ちは複雑であつた。「技それ自体は東京大会に少しバリエーションを加えたもので、さほど変わらない…どちらが優れた体操なのかといえば東京に軍配をあげたい」「伝わってくるのは大きな不条理に対する渾身込めた抗議である…だとするなら、この大会のペラの演技はもう他者の評すべきものではない」。その他、著

者は、個人種目でも3種目で優勝したチャスラフスカが表彰式では鎌と槌の国旗掲揚に対してそばを向いたこと、日程終了後に行われた結婚式の写真に映る彼女の表情がいずれもかたいことなどを記している。チャスラフスカと同時代を生きた人々へのインタビューからは、この頃の時代状況、体操選手の状況、チャスラフスカの人となり、そして、従来の自伝では語られていないメキシコ大会頃の状況なども窺える。

第3章（春、そして冬）では、「プラハの春」進行中のチャスラフスカやプラハの街の明るい印象がまず述べられている。次に、「人間の顔をした社会主義」（即ち、社会主義国家の内実への痛切な批判）を掲げたプラハの春が、ソビエトの介入を経て、冬に終息し、正常化する過程が、舞台女優クラモストワらへのインタビューも交えながら展開されていく。連覇を果たしたチャスラフスカがオリンピックから帰国したのは、まさにそのような状況下の秋であった。正常化に対して、彼女は、祝賀パーティで贈られた豪華な銀食器の大統領府への返却、二千語宣言への署名の非撤回という態度によってその意志を示した。同章では続いて、彼女のその後が、既存の出版物や様々な人物（例えば、ザトベック夫妻）へのインタビューにもとづいて述べられていく。日本での選手としての引退、長女・長男の誕生、コーチの資格取得、国内のスポーツクラブからの追放、パスポートの取り上げ、最低限の生活、夫との不和などである。体制の安定に寄与することから、公安当局は最初の署名者や著名人に幾度も署名の撤回と自己批判を迫ったが、チャスラフスカも含め少数の者は撤回もせず、亡命もしなかった。彼女は、1970年代の困難な時代を支えたものは何か、最も辛かったことは何かという質問に対して、「自分のなかにある気持ちに忠実ありたいと思ってきました。理想を裏切ることにはしたくはなかった。けれども、人間のプライドは壊れやすいものです。困難な時代、人がもつ良きもの、そうでないものを数多くみました…私と以前と同じようにつきあって友好関係を保持していつてくれた人は片手の指を数え

るに過ぎません」と答え、亡命しなかったことについては、「家族、両親、きょうだいと別れることは嫌だったし、チェコという国とチェコ人を愛していたから」と答えている。彼女の信念の強さ、家族・祖国への愛が感じられる。スポーツ史的側面では、同章からは、社会主義国家におけるスポーツの政治的利用、ミュンヘン大会（1972年）における女子体操の変化、著名な陸上選手ザトベックの実像、1960年代から1970年代のスポーツやオリンピックの今ほど商業主義的でなかった素朴な状況などが窺え、示唆的である。

第4章（復活と悲劇と）の冒頭では、正常化したチェコにおける1970年代の陰惨な時代状況とそのような中での小さな抵抗運動の継続がハヴェルの自伝などにもとづいて述べられている。プラハの春が共産党改革派によって始まったのに対し、1977年に生じた憲章77⁴¹を動かしたのは市民派と呼ばれる人たちであった。そのスポークスマンとなったのが、後に大統領に選出される劇作家のハヴェルである。憲章77もその芽が膨らむことなく摘まれていくが、後のビロード革命⁵¹における市民フォーラムの原型となった。このような背景の後、同章では、1970年代末から1980年代にかけてチャスラフスカを囲む状況に少しずつ薄明かりがもれてくる様子、そして1980年代半ば以降彼女を取り巻く環境がはっきりと好転していく様子が述べられている。最低限の生活を強いられていたチャスラフスカは1979年から1981年まで請われてメキシコで体操を指導し、1983年からは国内の上級スポーツクラブで働くことになった。著者はこの変化の理由として、外圧を挙げている（メキシコ大統領やIOC会長によるオファー）。さらに、ペレストロイカが始まり、1986年にクレムリンがチャスラフスカの存在を公式に認知したことによって、チェコ国内の新聞や雑誌も彼女の記事を掲載するようになり、1988年彼女は代表チームに20年ぶりに復帰した。その一方で、著者はこの時期彼女が愛した家族に不幸が重なったことにも言及している（弟、両親の他界、夫との離婚）。次に同章では、1989年の東欧革命を発端とする民主化の動き、

憲章77の復活と市民フォーラムの結成が述べられた後、チャスラフスカがこの動きにどのように対応したのかが述べられている。彼女は憲章77にはかかわってなかったが、大衆へアピールして欲しいというハヴェルの求めに応じ、1989年11月24日、反政府集会が開催されているヴァーツラフ広場（プラハの春に際してソビエト戦車で埋まった）のビルのバルコニーから沈黙を破り発言した。その趣旨は、同月17日の武力弾圧にあらためて抗議すること、現在の運動に賛同することなどである。アピールの最後は、「わたしたちのあとにつづく世代に、かれらの未来の選択と形成に参加する権利を、与えましょう」という言葉で締めくくられている。そのバルコニーには、彼女と同様に冬の時代に節を曲げず生きた人々が並んでいた。同章で続いて述べられているのは、1989年末から翌1990年にかけてチェコの政治体制が一気に変わることに伴う彼女の復活と、1993年に起こった事件を契機とする悲劇である。復活とは、彼女が請われて医療・福祉担当の大統領顧問、続いてチェコNOC会長となり、名誉を回復したことである。彼女が大統領顧問という激務をしばらく無給で、クラブのコーチと兼務して献身的に続けたこと、再び来日した彼女に対して荒川らが心からの対応をしたことには、この時代のスポーツ選手、あるいは人というものが感じられ、また、スポーツ史的側面では、クレムリンが東欧社会主義国家のスポーツにもたらした影響力に関する叙述（ベレストロイカも含めて）が示唆的である。ただ、チャスラフスカのNOC会長、IOC委員としての具体的な活動内容については、ほとんど述べられていない。一方、事件とは、彼女の息子が過失とはいえ別れた夫を死に至らしめたことであり、悲劇とは、これを契機に彼女に精神の変調をきたす徴候が見え始め、大衆からのパッシングや息子の有罪判決によって鬱症状がひどくなり、入退院を繰り返すようになったことである。このパッシングについて、著者は次のように述べている。「長く続いた“正常化時代”、もとよりだれもがチャスラフスカのように生きたわけではない…革命は過ぎ

去った。“栄達”を果たしえたのはごく一部の人間たちである。大統領顧問、オリンピック委員会会長に上り詰めたチャスラフスカ。その内実は知られぬままに、ある種のジェラシーの対象ともなる」。彼女は、国家権力に対しては苦難にもかかわらず自らの意志を貫き通したが、最も愛していた祖国の大衆に裏切られ、家族は崩壊し、自らの精神に変調をきたしたのである。悲劇といえよう。

このように著者は、第4章まではチェコの民主化の動きとチャスラフスカのこころを中心に描いているが、第5章（帝国に生きて）第6章（自由ロシアの子）第7章（メキシコの花嫁）では、ロシアの激動とチャスラフスカのライバルであったロシアの女子体操選手たちを中心に描いている。著者は、女子体操のメルボルン大会（1956年）からモントリオール大会（1976年）までのメダリスト（ラチニナ、ムラトワ、クチンスカヤ、ツリシチェワ）、アトランタ大会（1994年）からアテネ大会（2004年）までのメダリスト（ホルキナ）、そして、半世紀に及ぶ女子体操の歩みをその目で見詰めてきたロシア体操連盟副所長オガノフなどの関係者にインタビューを行っている。驚くべき取材力といえよう。インタビューからは、彼女たちの生まれた時代と人々、体操との出会いと成長、ロシアの体操やオリンピックの状況及びその変化、彼女たちのチャスラフスカへの思い、政治とのかかわり、引退後の生活、私生活、生き方、祖国への思い、世代の変化などが窺える。そして、彼女たちの人生にも影響を及ぼした社会主義について、著者は次のように述べている。「レーニンが生み出した幻想体系が、その亜流・変種も含め、二十世紀最大の夢であったことはまぎれもない。同時にまたそれは、これまで人類が生んだ数々の夢（宗教・思想）の域を超えることもなかった。これまでの夢と同じく、福德よりもより多くの惨禍と災いをもたらしたまま、歴史の彼方に消え去ろうとしている…二十一世紀のとば口にあってよぎるのは、いまようやくひとつの時代が終焉したという思いである」。

第8章（白い妖精）では、モントリオール大会

において10.0の満点を連発、金メダルを獲得したコマネチ、社会主義というより古代専制国家に似たルーマニアのチャウシェスク政権とその崩壊、コマネチのアメリカへの亡命が主に描かれている。この章の初めに、著者はコマネチのことを、「女子体操史上、革命児という選手をあげるとすればこの選手であろう。ベラ・チャスラフスカ、あるいはナタリア・クチンスカヤの世代が保持してきた技プラス女性美から、美という曖昧さを削いだ、技そのものを競う競技へと体操を移行させた」と述べている。この移行について、チャスラフスカは、「かつての体操には、心を引き込む、女性らしい優美さがあった。このことが失われつつあるのはとても残念です」と述べ、著者は、時代的な変化と関連づけ、「千九六〇年代から七〇年代へ。おそらくこの間に、戦後的な価値観、規範、美の形というものが現代的なそれへと移り変わる分岐点があったのだろう。そしておそらくそれは、経済成長—高度消費という社会構造をどこかで反映していたのだろう」と述べている。次に同章では、ルーマニアの社会やスポーツの状況、コマネチの生まれた時代、彼女と体操との出会い、成長、目標とした体操や人物、チャスラフスカへの思い、報奨金、引退後の生活、ルーマニア革命直前における亡命などが述べられている。特に注目されるのは、チャスラフスカが国内に留まったのに対し、コマネチが革命直前に自由を求め国外へ亡命したことであろう。偉大な選手であり、反政府分子でもなかったコマネチは、引退後、亡命まで、ルーマニア体操協会で働き続けた。海外からの招待やコーチの依頼はしばしばきたが、政府がこれを認めなかったのである。この理由を体操協会事務長は、次のように述べている。「チャウシェスクの意向です…チャウシェスクは自分以外、あるいは自分以上に名を知られた人物が国内にいるのがおもしろくなかった」。ルーマニアは、革命以降も政党の離合集散が続き混沌としているが、同国の体操協会の一人は、「経済状態はひどいものです。でもチャウシェスク時代がよかったという声はない。いまは一人ひとりに自由がある。それはなに

ごとにも代えがたいものです」と述べている。

第9章（歌声は消えず）では、再びチェコ及びチャスラフスカのことが中心に描かれている。冒頭でピロード革命後のチェコの再生状況が述べられた後、苦難の時代に節を曲げなかった少数の人々、そして、彼らのチャスラフスカへの思いが述べられている。ミニ・ハヴェルと称される上院議員のピットハルトは、チャスラフスカの意味について、「頂上を極めた体操選手だったということ以上に、彼女の存在自体により大きな意味があったと私は思っています。正常化時代、チェコ国内には人生を犠牲にした無数の人々がいた。その人たちにとって彼女は大きな支えであった。当局は、抵抗者のなかでもシンボリックな人々を目の敵にしていじめ抜いた。けれども屈しないものがいた。チャスラフスカしかり、歌手のマルタ・クビシュヴァしかりです。チェコにとっていまなお重要な意味を持つ存在だといっていいでしょう」と述べている。著者は、「それが『チェコにとって』のみならず、同時代を生きた多くのものにとって、またこれから迎える時代のなかにおいても意味あることに違いない」と、普遍的な価値を補足している。また、なぜ、彼女はそうように生きたのかについて、クビシュヴァは次のように述べている。「彼女も私も政治のアマチュアだった。ただ、それが正しいか正しくないか、嘘か嘘でないか。判断はそれだけだった。感覚的というか本能的というか、理屈じゃない」。このような本源的なヒューマニズムについて、著者は、「素朴でシンプルなる思い。それこそがこの世にある思いのなかでもっとも強靱なものなのだ」と述べている。

このように著者はチャスラフスカを追い続けたが、2003年6月にプラハを再び訪問した際にも、体調の不良もあって本人との面談は結局かなわず、書面によるやりとりに止めるしかなかった。終章（狐の森）では、彼女がプラハを離れ、モラヴィア北部の村にある知人の家に住みつつ、病院と地域のケアサービスを受けているという近況がまず述べられている。そして、この章では彼女の意味と悲劇について、インタビューをもとに再度述べら

れている。女性キャスターのクラモストワは、「モラルのシンボルとしてかけがえのない存在であるはずだ。いま多くの人はそういう存在を忘れてしまっていますが」「個人的な悲劇だとは思いません。社会的な、あるいは時代的な悲劇を背負った悲劇だった」と述べている。また、長年チェコに住みチャスラフスカと交流のあった小野田勲は次のように述べている。「チャンピオンであったわけだから、いい意味でプライドが彼女を支えたことはあったでしょう。へんな生き方はできないんだって…でも少し違うのかもしれないなあ。彼女のなかでは、特別なことをしているわけでも、立派に生きているという意識もなく、ごくあたりまえのことだったのではないだろうか」。最後に、著者は20世紀と彼女の人生について、次のように記している。「チャスラフスカによぎる言葉を列記すれば、＜信義＞＜規範＞＜倫理＞＜献身＞…といった類の言葉である。いまやほとんど死に絶えたような言葉。けれども、時空を超えて不易なるものはこのような言葉に付随する精神の形である。打ち続く戦争と偽りの革命。それがわれわれの生きた世紀であった。過酷な時代と不条理なる運命を全身で引き受けつつもなお、個の精神が侵されることはない。たとえ、病み、老い、衰えても」。

文庫本の解説で白石一文氏が述べているように、本書を通じて、チャスラフスカの人生のみならず、冷戦時代に東側で生きた人々の姿、20世紀最大の負の遺産と呼ばれる社会主義革命の実相、不条理な中で個人としての人間がいかにすれば良心を守り抜けるか、国家と個人との関係などを我々は知る。

ノンフィクションとしての本書の読み方は多様であろうが、主に東独スポーツを政策史的に研究してきた評者が、特に示唆を得たのは次のことである。

第一は、個の人生を追った本書を通じて、冷戦時代の社会主義国家における社会やスポーツの内実、その違いや変化、そこで生きたスポーツ関係者の姿、そして、社会主義体制の崩壊していくさ

まが理解できることである。一冊の書でこれほど多くの知見や情景をもたらしたものが、わが国においてあったであろうか。イデオロギーと政治に巻き込まれていった社会主義国家におけるスポーツというものが内側の視線から生々しく描かれている。そして、社会主義国家のスポーツといっても、民族、伝統、国情によって、類似とともに相異があることを改めて認識させられる。ただ（勿論、本書は歴史書ではないが）、今までの多くの東独スポーツ史研究にもみられるように、社会主義国家におけるスポーツの政治的利用などネガティブな側面が前面に押し出されている気配は否めない。言うまでもなく歴史を総合的に評価しようとするれば、そのポジティブな側面にも目を配る必要がある。

第二は、本書の叙述を可能とした著者の取材力の凄さである。著者は、チャスラフスカに関してだけでも、チェコ、日本、ロシア、ルーマニア、アメリカの各地で彼女の関係者や人々に対する取材を行い、歴史的資料からでは確認しえない側面を明らかにしている。著者のインタビューにおける姿勢は丹念かつ執拗とさえいえるほどである。著者は一つの問いに対する解答を、複数の関係者、同時代の一般の人、そして同時代の違う地域の人、さらには違う時代の人から得、咀嚼し、人、世代、国家、時代の実相に迫ろうとする。インタビューにともなう記憶の不確かさを是正するものでもあるこのような姿勢は、ベルリンの壁が崩壊した今、東独スポーツ史研究のあり方にも示唆を与えるものである。なお、東独スポーツ史研究に際する旧東独スポーツ関係者へのインタビューについて、ベッカーは、公文書研究に対するその有効性を認めつつも、国家崩壊後批判に晒された当事者に対するインタビューについては、当事者が主観的な証言をすることもありうることから、その「方法上の難しさ」も指摘している⁹¹。

第三は、著者後藤氏の歴史観に関してである。最近山本徳郎先生がよく「大きな歴史」と「小さな歴史」に関して発言されている。そこで、高橋義人氏によって著された『「大きな歴史」か【小

「小さな歴史」かーゲーテ『色彩論』歴史編に学ぶー」を読んでみたが、少なからず驚きを覚えた。後藤氏の著作の中には歴史観という言葉はみあたらないが、その叙述から読み取れる歴史観が、ゲーテの歴史観に近似しているのである。高橋氏は次のように著している。「ゲーテはヘーゲル流の『大きな歴史』に対してしばしば懐疑的な眼差しを向け、むしろ『小さな歴史』を大事にしようとしたのです」「ゲーテは決して『大きな歴史』に背を向けていたわけではありません…『大きな歴史』に翻弄される『小さな歴史』、ささやかなひとりひとりの生を過小評価してはならない、『大きな歴史』も『小さな歴史』との関連において捉えなければならない、そう考えていました⁷⁾。また、高橋氏は、「大きな歴史」が提唱されていた時代にどうして「大きな歴史」よりも「小さな歴史」を重視できたのかについて、次のように述べている。「忘れてはならないのは、ゲーテが意識的に自伝を書きつづけた作家であったということです」「彼は自伝という自分史を通してながら世界の出来事を見ていました。そしてそれが、ゲーテが意識的に採用していた歴史の見方だったのです⁸⁾。後藤氏は、「小さな歴史」を重視するゲーテの歴史観と同じような歴史観をもって、チャスラフスカという個のささやかな生を眺め、社会主義社会が多く存在した20世紀という時代の性格を浮かび上がらせようとしたように思われる。このような歴史観は後藤氏の他の著作、例えば『牙 江夏豊とその時代』からも感じられる⁹⁾。現在、評者は旧東独スポーツ関係者によって書かれた自伝的な著作を読み進めているが、これらの著作もゲーテのいう「小さな歴史」かもしれない。旧東独スポーツ選手の自伝的な著作としては、例えば、女子アイススケートの名選手ザイフェルトによるものなどが挙げられる¹⁰⁾。自身の半生を綴った同書からは、ザイフェルトのスケート以外にも積極的に人生を生きる姿とともに、社会主義国家や国家崩壊に奔騰される姿も窺える。このようなスポーツにかかわる小さな歴史をできるだけ多く収集し、大きな歴史を創る架け橋をつくることも我々の課題

ではなかろうか。

以上のように、本書はノンフィクションであるが、スポーツ史を研究する者にも多くの示唆を与える魅力的な書といえよう。社会主義の崩壊という変革期にある我々は、これを対岸の火事と見なさず、社会主義社会におけるスポーツの実態をさらに明らかにするとともに、社会主義革命がスポーツにもたらした遺産、20世紀におけるスポーツの意味を検討しなければならない。現存する社会主義国家及び資本主義国家のスポーツを考えるためでもあるからである。本書の中で、評者の心に残った文章（第9章）を紹介し、本稿を終えたい。先のピットハルトの言葉である。「プラハの春がつぶされて以降、チェコ社会は陰惨な空気に覆われた。そのなかでスポーツの果たした役割は随分と大きかった。ハヴェルの戯曲のもつ影響力はせいぜい百二十人といったところでしょう。上演されることもめったになかったわけだが。その点、スポーツや音楽は大きな影響力をもった。アイスホッケーの暴動はいわば鬱積の捌け口であったわけだが…」。

註

- 1) 第一次世界大戦後、ハンガリー・オーストリア帝国から独立したこの国の名は、以降、1993年チェコ共和国とスロヴァキア共和国の分離独立に至るまでチェコ・スロヴァキアであるが、煩雑さを避けるため原則チェコと表記する。
- 2) 後藤正治氏は1946年京都生まれ。『リターンマッチ』で大宅壮一ノンフィクション賞を受賞するなど著名なノンフィクション作家である。『ベラ・チャスラフスカ 最も美しく』は刊行後から各界から注目されることとなり、毎日新聞2004年8月1日、朝日新聞2004年9月19日、読売新聞2004年10月3日、週刊文春2004年8月26日などに、すでに多くの書評が掲載され、その反響の大きさがしのばれる。
- 3) かつてはソビエト連邦の下で共産主義に属した国々を「東欧」と呼んだ。しかし1989年にベルリンの壁が崩壊し東欧革命によって各国の共

- 産党政権が連鎖反動的に倒れると、こうした地域は「自分たちの地域のことを中欧と呼んでほしい」と主張するようになった。
- 4) 憲章77と呼ばれる運動は、1977年に起きた。ヘルシンキで採択された国際規約「市民的および政治的権利に関する国際規約」及び「経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約」に引っかけて始まった運動である。掲げられたものは、プラハの春のそれと多分に重なっている。
- 5) この革命では後のルーマニア革命のように大きな流血に至る事態は起こらなかった。このためこの革命を柔らかなピロード（ベルベット）の生地に喩えて「ピロード革命」という。
- 6) Buss, W., Becker, C. (Hrsg.), 2001, Der Sport in der SBZ und frühen DDR, Schorndorf, S.51.
- 7) 高橋義人、『『大きな歴史』か『小さな歴史』かーゲーテ『色彩論』歴史編に学ぶー』、芦津丈夫・木村敏・大橋良介・高橋義人編、『文化における<歴史>』、人文書院、2006年、184～185頁。
- 8) 同上書、188～189頁。
- 9) 後藤正治、『牙 江夏豊とその時代』、講談社文庫、2005年。
- 10) Seyfert, G., 1998, Da muß noch was sein. Mein Leben-mehr als Pflicht und Kür, Berlin. (文藝文庫、2006年9月10日刊、431頁、本体781円)